大腸内視鏡検査について

大腸内視鏡検査は診断と治療が同時に行えるため、大腸癌をはじめとする大腸疾患にはなくてはならない検査です。しかし、便がたまっている状態では検査はできませんし、治療中の病気によっては検査に注意が必要になってきます。そのため、大腸内視鏡検査を受ける方に検査の内容について十分理解していただき、注意事項を厳守していただかなければなりません。以下に大腸内視鏡検査について説明させていただきます。

１：目的

大腸は長さ約１．５ｍ、直径５㎝のホース状の管で、直腸と結腸から成り立っております。大腸内視鏡検査はこの大腸と小腸の一部（終末回腸）の病気の診断と治療を目的に行われる検査です。

２：前準備

① 内視鏡によるウイルス感染、生検やポリープ切除による出血を防止するために血液検査が必要になる場合があります。

② 食事の注意と下剤の服用

・ 大腸の中に便が残っていては十分な検査はできません。そのため食事制限が必要になります。検査数日前より海草・繊維の多い野菜・種のある果物など消化の悪い物はとらないようにしてください。検査前日は夜に下剤（プルセニド）を２～３錠内服していただき、検査当日は朝８時３０分～９時００分頃に来院してもらったうえ病室でさらに下剤（ニフレックという薬。２０００ml です）を服用していただきます。大腸がきれいになるのにおよそ半日かかることが多いので検査開始はだいたい午後となります。準備完了の目安は排液（排便）の中に“便かす”がなくなった状態です。必要に応じて適宜浣腸を追加いたします。

３：検査の実際

① 前処置

・検査直前に大腸の動きを止める薬（しっかりと検査を行うため）と鎮静剤（検査を少しでも楽にするため）を注射します。検査中はお酒に酔ったようにぼんやりし、検査直後はフラフラします。そのため、検査終了後は頭がはっきりしてくるまで病院で休んでいただきます。

②検査の方法

- 検査室に入ったらまず検査着に着替え、指輪・時計などの通電しやすい金具を外します。そして検査台の上に左側を下にして寝ます。肛門周囲に麻酔のゼリーを塗った後、検査医師が肛門より大腸内視鏡を挿入し、空気で大腸を膨らませながら、くねくねと曲がった大腸をまっすぐにし、長さ１．５ｍほどの大腸を８０㎝位に短くたぐり寄せるようにして盲腸・終末回腸まで大腸内視鏡を進めます。なお検査中は内視鏡の挿入や観察がしやすいように適宜身体の向きを変えていただきます。

  検査時間は一般的に３０分程度ですが、個人差はあります。検査による腹痛は多少みられますが、空気挿入による腹満や大腸が引き延ばされる痛みであり、心配はいりません。

  なお検査中に内視鏡的に切除できる病変が発見された場合、その場で対処できそうなものに関しては切除いたします。切除を希望されない方は検査前に申し出てください。全ての場合がその場で切除できる訳ではなく、病変の形状・大きさ・数などにより後日入院していただいて切除する場合があることをご了承ください。

４：検査後

食事・飲酒・運動・旅行・仕事などに注意や制限が必要になります。その期間や内容は個々により異なりますので、検査後に説明をお聞きください。

５：合併症

内視鏡によるものと内視鏡的切除による合併症があります。その主な合併症は出血と穿孔ですがその頻度は低く、出血で０．９％、穿孔で０．０５％程度です。出血・穿孔いずれの場合もクリップ（人間用のホチキスのようなもの）にて処置をいたしますが、場合によっては緊急手術になることもあります。

６：その他

他の病気で治療中の人は検査に注意が必要になりますので申し出てください。特に前立腺肥大・心臓病・緑内障・脳梗塞などで治療中の方は服用中の薬剤を一時中止していただくこともあります。なお、疑問点は主治医や内視鏡室のスタッフまでお尋ねください。

身延山病院

〒４０９−２５９５　山梨県南巨摩郡身延町梅平２４８３−１６７　TEL０５５６−６２−１０６１